

多田政一博士の著書から（97）詳細版

第三篇 「全體動的病原學」提唱 （二）消化器病について

理事 田中敏彦氏選

1935 年（昭和 10 年）刊行『綜統醫學提唱論』より

《本文》

口より肛門へと、此間の系統について最も簡便に概観するには消化管の酸度（pH）の測定による研究を取るがよからう。即ち胃の pH は 1 程度を基準にして、幽門、十二指腸、小腸、大腸、直腸と進むにつけて漸次 pH は増大してアルカリ度が上昇する。糞便の pH は 7.5 位の弱アルカリ性である。さてこうした段階的な概観も衣食住環境の影響の下に著しく左右されるであろう。然し、何れにせよ『完全なる消化吸収』を果たすために必須なる条件を便宜上項別に挙げれば次のごとくであろう。正常体においては、

1. 完全なる咀嚼。
 2. 食物の性質。（「酸アルカリ度」とか、「蛋白、澱粉、脂肪度」とか等）に對する臨機應變的な胃酸分泌。
 3. 弱アルカリ的糜粥^{※1}として、幽門より十二指腸に向ひ諸分泌酵素の活性作用を受ける。
 4. 滲透平衡^{※2}を腸吸収血管部^{※3}で左右しながら肝門脈及淋巴的吸収^{※4}を果たす。
 5. 適當なる糞便として處置され、アルカリ性排便を完行する。
- の如く簡単に考えてよからう。

然らば（1）の問題は衆知としてさておき、若し千差萬別なる種々の食物を嗜好する人間の日常に於て、應變適應的^{※5}な胃酸分泌障害が起こってくるならば忽ち「胃酸過多症」或ひは「胃酸缺乏症」を起こして來るであらう。こうした分泌障害は何故起ってくるか？それは例へばベルグマン一派のニッセンの報文を借りれば、何らかの原因で胃粘膜面に不正なる鬱血又は貧血が持續成立するときに起こるのであると云へる。

然らばかうした「鬱血」乃至「貧血」が何故胃に成立するかは、他の循環上の末梢血管が、靜脈歸還流過不及的不整のため、動脈側にまで不純なる血液の過不及を生ずるならば、（若しこの際血液デポート器官肝臓・皮膚・脾臓の適應調整力が發揮低調に立ち至つてをる場合は特に）容易に招來されるであらう。

解説

《語句説明》

- ※1 糜粥^{びじゆく}：消化の過程で食物と分泌物が混じり合ったもの
- ※2 滲透平衡^{しんとうへいこう}：半透膜^{はんとうまく}を介して異なる濃度の溶液が接触している場合に、溶質の濃度が両側で等しくなるように溶媒^{ようばい}が移動し、最終的には両側の溶液の濃度が等しくなる状態を指します。この状態に達すると、溶媒の移動が停止し、浸透圧^{しんとうあつ}も平衡状態になります。
- ※3 腸吸収血管部^{ちようきうしゆくわんぶ}：腸管の血管が栄養素を吸収するための重要な役割を果たす部分。
- ※4 淋巴的吸収^{りんぱ}：リンパ液が組織間隙^{かんげき}から再吸収されずに残った水分や物質のことを指します。
- ※5 應變適應的^{おうへんてきおう}：突然起こった出来事に対して適切な処置をとったり、うまく周囲の状況に合わせていくこと。
- ※6 静脈歸還流過不及的不整^{じようみやくきかんりゆう}：血液が静脈を通じて心臓に戻る際に、何らかの理由でこの流れが妨げられる状態です。

《所感》

多田博士は、消化器の健康状態や働きを簡単に知る方法として、消化管（口～肛門）における pH（酸性度・アルカリ性度）の変化を観察することをすすめておられます。

消化管は場所ごとに異なる pH 環境を持っていて（胃の pH は 1 程度を基準にして、幽門^{ゆうもん}、十二指腸、小腸、大腸、直腸と進むにつけて漸次^{ぜんじ}pH は増大してアルカリ度が上昇する。そして糞便^{ふんべん}の pH は 7.5 位の弱アルカリ性である。）、これがうまく保たれていることが健康のカギです。

また多田博士は、食べ物をきちんと消化・吸収するために、次のような条件が必要だと述べています。

1. しっかり噛む^か（咀嚼^{そしゃく}）
2. 食べ物の性質に応じた対応
3. 胃酸が適切に分泌されて、十二指腸～小腸で酵素がうまく働くこと
4. 吸収がスムーズに行われること
5. 排泄がスムーズであること（アルカリ性排便）

人間は毎日様々な物を食べますが、そのときに食べ物に合わせて胃酸を柔軟に調整できないと胃酸過多や胃酸欠乏が起こりやすくなります。その原因としては、何らかの原因で常時、胃の粘膜が「うっ血」や「貧血（血が不足）」の状態にある時だと言えます。その

時に起こりやすいと言えるのです。

では、なぜ胃にうっ血や貧血が起こるのかは、体全体の血流の乱れに関係していると言えます。

たとえば、静脈の流れが悪くなると、心臓に血液が戻りにくくなり、その結果、胃の血液循環にも異常が起こります。

更には、^{かんぞう}肝臓、^{ひふ}皮膚、^{ひぞう}脾臓などの血液の流れや量を調整する「血液の^{ちよぞうこ}貯蔵庫」が、日ごろからうまく働かない状態だと、臓器全般に更なる悪影響を与える事が考えられます。

だからこそ、生活医学の言っている【肝臓、腎臓、脾臓の手当】は日ごろから継続すべきなのです。